

日本語の誤用研究

東京大学留学生センター教授 市川保子

このコーナーでは、これから研究を目指す海外の日本語の先生方のために、日本語学・日本語教育の研究について情報をおとどけています。今回のテーマは日本語の誤用研究です。

誤用研究(error analysis)は、学習者がおかす誤りについて、どのような誤りが存在するのか、なぜ誤りをするのか、そして、どのように訂正すればよいかなどを考え、日本語教育、日本語文法理論などに役立てようとする研究です。

1. 誤用とは何か

まず誤用とは何かについて考えてみましょう。

学習者が文を書いたり、話したりするとき、私達は何か間違っていると感ずることがあります。その間違いは、「を」でなくて「に」だとか、「書かない」でなくて「書かない」だとか、聞き手(読み手)がはっきりわかる場合と、何となくおかしいのだけれど、どこがおかしいかはっきり指摘できない場合があります。このように「おかしい」と感ずるものが誤用(error)と呼ばれるものです。

誤用研究では、従来、文法的正確さに関わる誤用が重要視されてきましたが、現在は、伝達、コミュニケーションということを重視し、それらに関わる誤りについても重要視され始めています。

2. 誤用の要因

学習者はなぜ誤用をおかすのでしょうか。第二言語習得研究の立場では、外国語を学習する過程で誤用をおかすのは当然で、それはそのことばを習得するための一つのステップであるという考え方をします。誤用とはとらえずに中間言語(interlanguage)という呼び方をします。

習得研究が学習者の習得過程を追う「たて」の(縦断的)研究であるのに対し、誤用研究はある時点での学習者(多くの場合複数の学習者)の誤用をとらえて研究するもので、「よこ」の(横断的)研究ということができます。

誤用の要因は、母語干渉(interference of mother tongues)による誤りと母語干渉以外の誤りに分けられ

ます。母語干渉以外の誤りは、(1)言語内の誤り：目標言語(target language)の構造そのものが困難であったり、既習の言語規則を未知の構造に適用しようとした際の誤り{類推(analogy)・過剰般化(overgeneralization)}、(2)発達上の誤り、(3)誘発された誤り、(4)伝達方略に基づく誤り、(5)学習方略による誤り、また、単に不注意による誤りもあります。

3. 誤用には段階がある

その文が、絶対におかしいのか、ちょっとおかしいのかというように、誤用には段階(程度)があります。この段階は、二つの方向からとらえることができます。一つは、文法的な正確さ(accuracy)に関わるものと、もう一つは文章・談話としての適切性(adaptability)に関わるものです。

たとえば、(1)「あした東京をいきます。」や、(2)「きのう魚を食べます。」は、だれが見ても文としておかしいですね。(1)の文は「を」を「に」か「へ」にする必要があります。(2)は「食べます」を「食べました」にしなければなりません。では次の文はどうでしょうか。(3)先生に相談したところが、忙しいって言われた。(3)は文法的には誤用とは言えません。引用の「と」の代わりに「って」を使っただけです。しかし、これが作文などの書いたものの中の文であれば、書きことばの中に話しことばが混じることになって、不適切な文となります。また、「ておく」「てみる」「てくれる/てもらう」などは、それがなくても意味が通じる場合が多いですが、あったほうがより自然だという「自然さ」も適切性の中に含まれます。

4. 誤用の判定基準にも段階がある

誤用の段階のもう一つの方向は、間違っているかいないかは、人によって感じ方が違うということです。文法

知識が豊富で、なおかつ文法的誤りに厳しい言語観を持つ人は、そうでない人に比べて、おかしいと感じる度合いが強くなります。一方、文法知識が豊富でも、伝達重視の言語観を持つ人は、文法的誤りより、何をどう伝えるかを重要視します。

したがって、誤りかどうかを判断するときには、一人よりも複数の判断者がいたほうが客観的な判断ができることとなります。

5. 誤用の種類

誤用の種類としては、「1文レベル (sentence level) の誤用か談話レベル (discourse level) の誤用か」「書きことばか話しことばか」が一番大きな問題となります。

「私が太っている。」はその文だけを聞くとおかしい感じがします。「が」ではなく「は」にして「私は太っている」にしたいところです。しかし、「兄弟の中でだれが太ってる」というような話の流れでは、「(兄ではなく) 私が太っている」という状況もあり得ます。「は」と「が」の問題は1文の中だけでは間違いか否かが判断できず、文章・談話の中で判断しなければなりません。

次に誤用そのものの分類について説明します。誤用は大きく、「(1)脱落 (omission) (2)付加 (addition) (3)誤形成 (misformation) (4)混同 (alternating form) (5)位置 (misordering) (6)その他」の6種類に分類できます。

(1)脱落は、当該項目を使用しなければいけないのに使用していない誤用 {例: 机の上に映画のチケットφ(が) 2枚置いてある (「φ」は不要の意味)} (2)付加は、脱落とは逆に、使用してはいけないところに使用している誤用 {例: 兄弟は8人が(φ)いて、シアトルやシカゴに住んでいる} (3)誤形成は、活用、接続の仕方などの形態的な誤り {例: 会いて(会って)ください} (4)混同は、助詞「は」と「が」、ムード「ている」「である」、自動詞・他動詞などのように、他の項目との混乱による誤り、(5)位置は、その項目の文中での位置がおかしい誤り {例: ぜひ(φ)これだけはあなたにφ(ぜひ)見せてあげたい} です。

6. 訂正 (correction) ということ

誤用研究に関連して、その誤りをどのように訂正するかという問題が出てきます。どのような基準で、そして、どの程度訂正するのか、いつ訂正するのが問題となります。これは3で誤用には段階があると説明しましたが、同じように訂正にも段階があります。

誤りの種類・性質をはじめ、授業全体の目標、個々の

練習の目標、時間の制約、誤りをおかした学習者の性格・実力・年齢などが訂正に関係してきます。

文法的正確さを問題にする場合は、その訂正も厳しくし、コミュニケーションを大切に考えるときは、多少の文法的正確さは無視されるべきでしょう。

訂正をいつ行うかも難しい問題です。作文など書いたものも時間が経ってしまうと、作成者の発話意図があまりにまいになる場合があります。作成後できるだけ速やかに訂正を行うのが望ましいですが、会話などでは、逐一訂正するのではなくて、ある程度の発話ののちにまとめて行うほうが効果があるでしょう。

7. 誤用研究の目的

誤用研究は何に役に立つかという、誤用研究の目的は大きく二つあります。一つは、第二言語習得理論や日本語文法研究として専門化される、理論的アプローチに向かう方向で、もう一つは、日本語教育への貢献です。後者は、誤用を分析評価し、それを用いて(資料の直接的利用)、教材やテストを作成したり、教授法に応用したりすることができます。最近の辞書の中には、このような言い方はしないと、学習者がおかしがちな誤用の例を示しているものもありますが、それなどは誤用研究の成果を生かしたものと言えるでしょう。

基本的な参考文献

- 市川保子 (1997) 『日本語誤用例文小辞典』 凡人社
 市川保子 (2000) 『続・日本語誤用例文小辞典』 凡人社
 小篠敏明 (1983) 『英語の誤答分析』 大修館書店
 Corder, S.P. (1967) "The Significance of Learners' Errors." IRAL, 5
 ——— (1971) "Idiosyncratic Dialects and Error Analysis." IRAL, 9, 2
 Dulay et al; Krashen, S. (1982) 『Language Two.』 Oxford: Oxford University Press
 Etherton, A.R.B. (1977) "Error Analysis: Problems and Procedures", ELTJ, 32
 Johansson, Sting (1975) Papers in Contrastive Linguistics and Language Testing. Lund: W.K.Gleertup

インターネットで調べられるもの

「寺村誤用データ」「日本語学習者の作文コーパス」
<http://cookie.lang.nagoya-u.ac.jp/pub/>